



# 『オリジンから考える』

(鶴見俊輔・小田実共著／岩波書店／二〇一二年)

## 「現場知」の人・小田実と

### の架空対話

高草木 光一

本書は鶴見俊輔と小田実の共著という形をとってはいるが、小田は2007年7月に没しているので、変則的な編集になっている。もともと、2007年春、2人の対談の企画が持ち上がったという。2007年2月、岩波書店『玉砕／Gyokusai』、大月書店『9・11と9条』、新潮社『終らない旅』の合同出版記念講演で、小田は1963年に講談社から刊行した長編小説『大地と星輝く天の子』（岩波文庫、2009年）を取り上げて、その素材となったソクラテス裁判を中心に古代アテナイのデモクラシーについて語っている。その後、体調不良のなか、トルコへの取材旅行を敢行したのは、アテナイのデモクラシーを裏から支えていた黒海沿岸の植民都市を調査し、マーティン・パナール『黒いアテナ』が提起した「古典文明のアフロ・アジア的ルーツ」を自分の目で確認するためであったという。がんに侵されていたこの頃、小田は、自

分の思想的原点である古代アテナイのデモクラシーを再検討したうえで、新たな世界史像に挑む構想をもっていたことになる。そのようなきに、「ベ平連」（ベトナムに平和を！市民連合）時代から「九条の会」に至るまで長く深い親交をもつ鶴見との対談が企画された。そして、その企画は小田の病と死によって頓挫していた。

### 資質の違いを際立たせる

本書は、当初の目論見を活かして、鶴見と小田が対峙するような工夫がなされている。Ⅰ「小田実との対話」は、鶴見の執筆による小田との架空対話を柱としていて、直接に鶴見と小田が向き合う形になっている。Ⅱ「オリジンから考える」は、先に挙げた小田の晩年の講演録、および論説、Ⅲ「哲学の効用」は、鶴見の最近の講演録等、Ⅳ「トラブゾンの猫」は、小田の絶筆となった未完の小説である。ⅡからⅣまでは、小田と鶴見の異なる資質が際立つように組み合わせられている。

本書のタイトルと同じ標題をもつⅡでは、小田は、『大地と星輝く天の子』に遡ることで、これまでほとんど触れてこなかった「デモス」の腐敗の問題を指摘し、併せてソクラテスの「反デモクラシー」に批判の矢を向けている。小田のデモクラシー論の奥深さを窺うことのできる貴重な論考である。しかし、ここで前面に打ち出されている「小さな人間」という概念は、小田が論理をシンプルにすればする

ほどわかりにくいものになっている。

### 「小さな人間」と「大きな人間」？

「ベ平連」時代の小田は、「市民」を掲げていた。「市民」も「市民社会」も存在しないとされる1960年代の日本で「市民」を語る以上、それは動的な概念とならざるをえない。「市民」を運動のなかで変化し成長するものとして捉え返すことで、独自の概念に練り上げていくことができたのである。また、「される側」という発想は、ベトナム戦争における被害と加害の連鎖の論理が基になっている。「被害者となること」によって加害者になる」という指摘は、ベトナムから遠く離れた日本人の加害者性をも問う鋭い問題意識に支えられていた。「される側」には、「する側」との間の鮮やかなコントラストがあり、なおかつ立場の逆転の可能性を秘めたダイナミズムがあった。しかし、「小さな人間」にはどんな含意があるのだろうか。

小田が作家として「小さな人間」の「虫瞰図」的視点を貫こうとしたことはわかる。ソクラテス裁判の文脈のなかで、プラトンの哲人政治やテクノクラート支配への批判として「小さな人間」のデモクラシーが語られるのもわかる。しかし、「大きな人間」に大統領、国防長官や「大金持ち」「政・財界の大ボス」（125頁）を入れ込んで、「小さな人間」と「大きな人間」の対抗図式を現代社会分析にまで持ち出すと、焦点の定まらない茫漠とした印

象を与えてしまいうだろう。

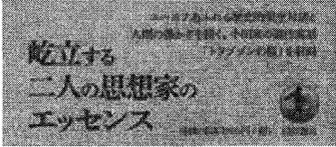
### 自由闊達な知の戦略

「小田さんの日本語で書くものにはマルクス主義の裏打ちがないからな」(48頁)という鶴見の発言は、小田がイデオロギーとしてのマルクス主義から自由であるという肯定的評価のなかに、近現代を理解するうえで基礎的な思想・方法であるはずのマルクス主義を無視していることへの批判的評価を滑り込ませていくように見える。近現代の哲学・思想に圧倒的な博識をもつ鶴見にとつて、小田の素朴な発想はときに神経を苛立たせるものがあったのではないか。それが実は鶴見の失言に端を発する二人の諍い(38―40頁)の根底にあったのではないか。そんな思いを拭い去ることができない。

## オリジンから考える

鶴見俊輔

小田実



で数多くの仕事を残してきただ。90歳近い高齢でもあり、もうろくを半ば装ったと

ほけた味で「おじいさんの知恵袋」的な四方山話を披露する(ⅠおよびⅢ)。「大学知」から外れているとは言っても、ハーヴァード大学でクワイン、ラッセル、カルナップ等の錚々たる哲学者に薫陶を受けた鶴見は、骨太の世界的な「学問知」に支えられている。だからこそ、自由闊達・縦横無尽に知の戦略を立てることができた。反戦の意志を貫いたがために灯台社(キリスト教の一派)から除名された日本支部長・明石順三やトルーマン大統領に原爆投下不要の進言を行なったリーハイ元帥らに着目する鶴見の発想は、「大学知」に飽き足らぬ者に多くの示唆を与えてくれる。

### 「学問知」の枠を越えた小田

ところが、小田のほうは、その「学問知」の枠をも越えてしまっている。本書のⅣとして取められている「トラブゾンの猫」にしても、未完ながら、「ヨーロッパ」や「人間」を徹底的に相対化したところで「世界史」を描き直そうとする壮大な意図を読み取ることができ。鶴見の評価では、夏目漱石、柳宗悦、石橋湛山、西田幾多郎と並んで小田実が、「自分で考え、自分で思想をつくり出した人」(63頁)であるという。小田は、現場の混沌のなかから素手で世界を造形する「現場知」の人だった。『大地と星輝く天の子』、『HIROSHIMA』、『河』といった大作は、膨大な資料を読み抜いたうえで、図抜けたスケールの物語Ⅱ歴史を描き切っている。日本

の知識人に標準的な教養を超越したところで問題を考えていた。鶴見は、だから、小田の武骨な手つきには目をつぶった。鶴見によれば、小田はトマス・リードもチャールズ・パーズも読んだことはないだろうが、その「人間みなチヨボチヨボヤ」の発想は「パーズの間違い主義にも、リードの常識哲学にも近い」(55頁)という。リードはともかく、「アブダクシヨン(仮説的推論)」の論理学者パーズを小田と結びつけるのは、稀代の碩学・鶴見俊輔ならではの技であり、また「小田宗」への帰依(44頁)を表現しているように見える。

本書を読み終えて、鶴見がノブレス・オブリージュを体現し、戦後日本文化のパトロン的役割を果たしてきた人物であることを強く感じる。彼は、「大学知」「学問知」を外れた才能を見いだし、育むことを自らの課題としていた。オルターナティブの豊かさが文化の厚みを形成するという固い信念をもっていた。そして、規格外の怪物・小田実を愛し、庇護した。その2人の活動を編集者として支えつづけたのが、本書の担当でもある高村幸治である。福島原発事故で既成の学問や科学技術のあり方が根源的に問い直されている現在、「大学知」「学問知」以外の知をどのように築き上げていくのかという課題は、「いのち」の危機をいかに生き延びるのかという根源的な課題とも重なっていると考える。

(たかくさぎ・こういち/慶應義塾大学経済学部教授)

